

輸入検疫で発見された主な重要害虫

学名：*Thrips imaginis* Bagnall

英名：plague thrips, apple blossom thrips
(アザミウマ目 アザミウマ科)

本種は、我が国の輸入植物検疫で発見されているアザミウマ類の中でも発見件数が多い種のひとつであり、オーストラリア、ニュージーランドから輸入される野菜や切り花から頻繁に発見されている。

分布 オーストラリア原産だが、ニュージーランド、パプアニューギニア、ニューカレドニア、フィジーからも記録がある。

寄主 キク科、マメ科、フトモモ科、ヤマモガシ科、バラ科の野生植物、栽培植物を問わず広範囲の植物から記録がある。特に、リンゴやセイヨウナシを好むとされる。

形態 本種成虫は雌雄ともに長翅型である(図1)。雌成虫の体色は全体に黄色～褐色のタイプと、腹部は褐色、頭部～胸部はやや淡いタイプがある。前翅は一樣に淡色。体長は1.1～1.5 mmで、褐色の個体の方が大きい傾向がある。生きている時は、同じ *Thrips* 属であるネギアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ、キイロハナアザミウマによく似る。実体顕微鏡を使って慎重に観察すると、ネギアザミウマでは単眼が不明瞭(本種は赤橙色で明瞭)であること、ミナミキイロアザミウマとキイロハナアザミウマでは腹板と側背板に副刺毛を欠く(本種には副刺毛がある(図2))などの違いはあるが、正確に同定するにはプレパラート標本を作製し、生物顕微鏡で体の各部を観察することが必要である。雄成虫は一樣に白色～黄色で、雌成虫より小さい。

生態 幼虫及び成虫は、花、葉などを吸汁する。卵は植物組織(主に花とその周辺)の内部に産みつけられる。受精卵は雌、未受精卵は雄となる。幼虫は、花の中に生息していることが多く、明るい日差しの下では、花の奥に潜り込んでいるため人目につきにくい。夜間や日が陰ると表面にはい出してくる。蛹の期間は土中で過

す。成虫はよく飛翔し、風に乗り長距離移動もする。発育期間は、20℃で約15日、25℃で約10日であり、約8℃以下では卵・幼虫とも発育せず、雌成虫は産卵しない。

被害 幼虫や成虫が花や葉などを吸汁することで、表面に多数の小白斑が生じ、排泄物により小黑点が生じる。また、吸汁により花や果実の成長阻害、奇形、矮化、えそ、色付き不良などの被害が生じる。リンゴでは、花の褐色条斑、雄しべや雌しべの衰弱や枯死による受粉の阻害、重症な場合は開花せずに枯死することもある。イチゴでは花が枯れたり、奇形果の原因となるという。本種は、ネギアザミウマなどが媒介するトマト黄化えそウイルス(TSWV)などのトスポウイルスを媒介することは知られていないが、感染した花粉を介してプルナスネクロティックリングスポットウイルス(PNRSV)を伝搬できることは実験により確認されており、無病なモモなどが当該ウイルスに感染する原因のひとつとみられている。

防除 本種はオーストラリアにおいて、リンゴに深刻な被害を与えたが、シメトエート剤、スピノサド剤などの殺虫剤による防除が有効であり、今のところ薬剤抵抗性の発達は確認されていない。寄生蜂やハナカメムシ類、昆虫病原糸状菌などの天敵が知られているが、生物的防除法は開発されていない。その他の対策として、発生源となる果樹園内及びその周辺の雑草を開花期前に除去する方法がある。



図1：雌成虫(プレパラート標本) 図2：第6腹板(A)及び側背板(B)上の副刺毛(破線囲み)